少年の日の思い出 (2)

ヘルマン・ヘッセ
高橋 健二 訳

(ぜいたくな設備がない「僕」は、ちょうの収集を仲間には見せず、妹たちにだけ見せていました。次の文章は、「僕」が、隣の子供・エーミールに、コムラサキというちょうを見せに行く場面です。)

あるとき、僕は、僕らのところでは珍しい、青いコムラサキをとらえた。それを※展翅し、乾いたときに、得意のあまり、せめて①隣の子供にだけは見せよう、という気になった。それは、中庭の向こうに住んでいる先生の息子だった。この少年は、非の打ちどころがないという悪徳をもっていた。それは、子供としては二倍も気味悪い性質だった。彼の収集は小さく貧弱だったが、こぎれいなのと、手入れの正確な点で、一つの宝石のようなものになっていた。彼は、そのうえ、傷んだり壊れたりしたちょうの羽を、※にかわで継ぎ合わすという、非常に難しい、珍しい技術を心得ていた。とにかく、②あらゆる点で模範少年だった。そのため、僕は妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた。

この少年に、コムラサキを見せた。彼は、専門家らしくそれを鑑定し、その珍しいことを認め、二十※ペニヒぐらいの現金の値打ちはある、と値踏みした。しかし、それから、彼は難癖をつけ始め、展翅のしかたが悪いとか、右の触角が曲がっているとか、左の触角が伸びているとか言い、そのうえ、足が二本欠けているという、もっともな欠陥を発見した。僕は、その欠点をたいしたものとは考えなかったが、こっぴどい批評家のため、自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。それで、僕は、③二度と彼に獲物を見せなかった。

※展翅…標本にするために虫の羽を広げて固定すること。
にかわ…ゼラチンなどからなる動物性の物質で、接着剤などに用いられる。
ペニヒ…かつてのドイツの通貨単位。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「隣の子供」に対して、「僕」はどのような感情をもっていたか。適当なものを選びなさい。

ア　自分よりもちょうの収集が小さくて貧弱なので、優越感を抱いていた。
イ　感心しつつも、欠点がない点を妬ましく思い、好きになれないでいた。
ウ　自分にはない優れた技術をもっている点を尊敬し、「彼」を慕っていた。
エ　収集の手入れが正確で、「彼」のようになりたいとただただ憧れていた。

〔　　〕

(2) ――線②「あらゆる点で模範少年」を言いかえた言葉となるように、解答欄に当てはまる言葉を本文中から十字で書きぬきなさい。

□□□□□□□□□□少年

(3) ――線③「二度と彼に獲物を見せなかった」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア　「彼」が珍しいちょうであることを認めたことに満足し、それ以上「彼」にちょうを見せる必要がなかったから。
イ　「彼」がたいしたことのない欠点を指摘したことで、「彼」のちょうに対する鑑定が疑わしいように思えてきたから。
ウ　「彼」の批評のせいで珍しいちょうをとらえた喜びがうせてしまい、「彼」にちょうを見せる気にならなくなったから。

〔　　〕